日本國天皇家論
章　上宮聖王

日本國天皇実伝

隋書・倭王は上宮聖王

遣隋使は第一回600年と第二回607年の二回である。倭國と隋との国交は二回の遣隋使で終わった。これは608年、隋の使者文林郎裴清が来日して、倭国王と面会した記事の後、隋書の最後の言葉「此後遂絶」に表れている。

600年・第一回遣隋使

隋書第81巻列伝東夷伝倭国

開皇二十年、倭王姓阿每、字多利思比孤、號阿輩雞彌、遣使詣闕。上令所司訪其風俗。使者言倭王以天為兄、以日為弟、天未明時出聽政、跏趺坐、日出便停理務、云委我弟。高祖曰:「此太無義理。」於是訓令改之。

開皇二十年（文帝、推古8年、600年）、倭王の姓は阿每（アマ）、字は多利思比孤（タシリヒコか）で阿輩雞彌と号した。使を遣わして闕（隋都長安）に詣った。上（文帝）は役人（係官）にその風俗を尋ねさせた。使者は「倭王は天を以て兄とし、日を以て弟とする。天が未だ明けない時、出かけて政を聴く。あぐらをかいて坐り、日が出れば、すなわち政務を停め、我が弟に委ねるという」と云う。高祖（第一代文帝、581～604在位）は「これはおおいに義理がないことだ」といって訓えてこれを改めさせた。

王妻號雞彌、後宮有女六七百人。名太子為利歌彌多弗利。無城郭。内官有十二等:一曰大德、次小德、次大仁、次小仁、次大義、次小義、次大禮、次小禮、次大智、次小智、次大信、次小信、員無定數。有軍尼一百二十人、猶中國牧宰。八十戸置一伊尼翼、如今里長也。十伊尼翼屬一軍尼。

王の妻は雞彌（キミ）と号する。後宮には女が六、七百人いる。太子を名づけて利歌彌多弗利と為す。城郭はない。内官には十二等級ある。初めを大德といい、次に小德、大仁、小仁、大義、小義、大禮、小禮、大智、小智、大信、小信（と続く）、官員には定員がない。
軍尼が一百二十人おり、中国の牧宰（国守）のごとし。八十戸に一伊尼翼を置き、今の里長のようである。十伊尼翼は一軍尼に属す。　（「魏志倭人伝」岩波文庫）

第一回遣隋使は開皇二十年である。隋の高祖「文帝」は、581年～604年の在位で、「文帝」が隋を建国して既に二十年が経つ。いささか遅きの使者ではあるが、遣隋使の目的は隋の建国祝賀である。彼らは文帝への祝賀の大使である。倭王の姓は「阿每（あま）」である。「阿每（あま）」とは「天（あま）」である。「天（あま）」とは「阿米」である。倭王は姫氏「阿米」の一族ということになろう。

遣隋使の名前は記していない。推古紀には「小野妹子」の名前がある。しかし小野妹子は遣唐使である。推古紀に遣唐使小野妹子の記事は推古紀編者のミスである。第一回遣隋使の名前は日本書紀にも隋書第81巻列伝東夷伝倭国にもないが小野妹子だった可能性はある。

607年・第二回遣隋使

隋書第81巻列伝東夷伝倭国

大業三年(煬帝・推古十五年・607)、其王多利思比孤遣使朝貢。使者曰:「聞海西菩薩天子重興佛法、故遣朝拜、兼沙門數十人來學佛法。」其國書曰「日出處天子致書日沒處天子無恙」云云。帝覽之不悅、謂鴻臚卿曰:「蠻夷書有無禮者、勿復以聞。」

大業三年(607年)、その王の多利思比孤が遣使を以て朝貢。使者が曰く「海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと聞き、故に遣わして朝拝させ、兼ねて沙門数十人を仏法の修学に来させた」。その国書に曰く「日出ずる處の天子、書を日沒する處の天子に致す。恙なきや」云々。帝はこれを見て悦ばず。鴻臚卿が曰く「蛮夷の書に無礼あり。再び聞くことなかれ」と。

これが第二回遣隋使の記録である。使者は「仏法」を学ぶために来たと目的を述べる。しかし、ここはまず「煬帝」の即位祝賀の言葉を述べるべきであった。なぜなら隋では皇帝が「文帝」から「煬帝」に代わっていた。「煬帝」が気を悪くしたのも当然であろう。隋にやって来た諸外国からの使者は煬帝即位の祝賀使節団だった。ところが「倭國」の使者は「仏法を学ぶためにきた」と国際関係に疎い口上を述べた。しかし倭王「多利思比弧」の関心は仏法にあった。故に国書にただ「仏法」を学ばせに僧尼を送った」と書いたのである。

608年・隋使文林郎裴清来日

隋書第81巻列伝東夷伝倭国

明年(大業4年、推古16年・608)文林郎裴清使於倭国

随の煬帝の使者の名は文林郎裴清である。 三国史記巻27・百済本紀武王九年にも随の使者は「文林郎裴清」だと伝えている。

三国史記巻27・百済本紀武王九年(大業四年)

使を遣わして隋に入り朝貢す。隋の文林郎裴清、使を倭国に奉じ、我が国の南路を経たり

隋煬帝は「倭國」からの使節に対して、翌年608年に答礼使を派遣した。官位が文林郎の裴清である。この使者が「鴻臚寺の掌客斐世清」と同じだと説く人がいる。しかし二人は別人である。「文林郎裴清」は隋の使者で、「鴻臚寺の掌客斐世清」は唐の使者である。 隋使「文林郎裴清」の初来日に際して「倭王」はおおいに接待している。

倭王遣小德阿輩臺、從數百人、設儀仗、鳴鼓角來迎。後十日、又遣大禮哥多毗、從二百餘騎郊勞。既至彼都、其王與清相見、大悅、曰:「我聞海西有大隋、禮義之國、故遣朝貢。我夷人、僻在海隅、不聞禮義、是以稽留境内、不即相見。今故清道飾館、以待大使、冀聞大國惟新之化。」清答曰:「皇帝德並二儀、澤流四海、以王慕化、故遣行人來此宣諭。」既而引清就館。其後清遣人謂其王曰:「朝命既達、請即戒塗。」於是設宴享以遣清、復令使者隨清來貢方物。此後遂絶。

倭王は小德の阿輩臺を遣わし、従者数百人、儀仗を設け、鼓角を鳴らして来迎した。十日後にまた、大禮の哥多毗を遣わし、二百余騎を従えて郊外で慰労した。既に彼の都に至り、その王、裴清と相見え、大いに悦び、曰く「我、海西に大隋、礼儀の国ありと聞く故に遣わして朝貢した。我は夷人にして、海隅の辺境では礼儀を聞くことがない。これを以て境内に留まり、すぐに相見えなかった。今、ことさらに道を清め、館を飾り、以て大使を待ち、願わくは大国惟新の化を聞かせて欲しい」。裴清が答えて曰く「皇帝の德は併せて二儀、恩恵は四海に流れ、王を慕うを以て化し、故に使者を来たらしめ、ここに諭を宣す」。既に裴清は引き上げて館に就く。その後、裴清が人を遣わして、その王に曰く「朝命は既に伝達したので、すぐに道を戒めることを請う」。ここ於いて宴を設け、裴清を遣わして享受させ、再び使者を裴清に随伴させて方物を貢献させに来た。この後、遂に途絶えた。

隋書・倭王

隋書第81巻列伝東夷伝俀国の記録から倭王を探求してみよう。

(1) 倭王姓阿毎、字多利思比孤、號阿輩雞彌。天が未だ明けない時、出かけて政を聴き、あぐらをかいて坐り、日が出れば、すなわち政務を停め、我が弟に委ねるという 。

政庁の中心に座り、国政を担っている。また、弟が居て実務は弟に委ねている。あぐらをかいて座る様は「法隆寺・釈迦三尊像」を彷彿させる。尚、字は多利思比孤である。様々な解釈があるが、字の「多」は多い、「利」は鋭敏、聡明、「思」は思慮を表す。思慮深く、聡明な王という意味を持つ字である。

(2) 王の妻は雞彌(キミか)と号する。後宮には女が六、七百人いる。

國王は男性で、妻の宮には多くの女官がいる。妻は法隆寺釈迦三尊像光背銘に「二月二一日癸酉王后即世」 と書かれた女性である。

(3) 内官には十二等級あり、初めを大徳といい、次に小徳、大仁、小仁、大義、小義、大禮、小禮、大智、小智、大信、小信

冠位十二等級がすでに存在した。当時、百済には十六階、新羅には十七階、高句麗には十二階の官位が存在した。俀国の官位は高句麗と同じ十二階である。高句麗と俀国には密接な国際関係があった。

(4) 使者が曰く「海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと聞き、故に遣わして朝拝させ、兼ねて沙門数十人を仏法の修学に来させた」。

倭王は仏教的世界観を持ち隋皇帝を「菩薩天子」と呼んでいる。

(5) 大業三年(煬帝・推古十五年・607)、其王多利思比孤遣使朝貢。国書「日出ずる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙なきや」

倭王は国書に「日出ずる處の天子」と書いた。この「天子」を見て「煬帝」はひどく機嫌を損ねて「もう取り次ぐな」と云ったと隋書は書いている。しかしこれは「煬帝」の誤解である。国書には「聞海西菩薩天子重興佛法」と書かれていた。倭王は煬帝を「海西の菩薩天子」と呼んでいる。菩薩天子とは仏教上の存在である。倭王は随皇帝を政治的な意味で「天子」と書いたのではない。この用法は煬帝の業績を「重ねて仏法を興す」と讃えていることからも明らかである。自分もまた仏教を導入した。故に自分を海東の菩薩天子と表現した。
煬帝も自分も「天子」である。「天子」とは菩薩天子の意である。国書は仏教思想に基づいて書かれていた。倭王は自らを政治的な存在(国王)として「天子」と呼称したのではない。

(6) 我、海西に大隋、礼儀の国ありと聞く故に遣わして朝貢した。我は夷人にして、海隅の辺境では礼儀を聞くことがない。これを以て境内に留まり、すぐに相見えなかった。今、ことさらに道を清め、館を飾り、以て大使を待ち、願わくは大国惟新の化を聞かせて欲しい。

倭王は初めて隋に朝貢した。内政・外交等の国事は全て倭王の権限であった。つまり倭王は推古紀が書いているような「摂政」ではない。国王である。

(7) 大業四年(煬帝・推古十六年・608)に裴清が答えて曰く「皇帝の德は併せて二儀、恩恵は四海に流

れ、王を慕うを以て化し、故に使者を来たらしめ、ここに諭を宣す」。既に裴世清は引き上げて館に就く。その後、裴世清が人を遣わして、その王に曰く「朝命は既に伝達したので、すぐに道を戒めることを請う」

隋も初めて国交を開いた國という認識に立っている。

皇帝の徳は併せて二儀、恩恵は四海に流れ、王を慕うを以て化し、故に使者を来たらしめ、ここに諭を宣す。

隋使・裴清はこのように述べている。皇帝の徳を説き、王化を望む。そのために来た。この意味は政治的に云えば册封体制への傘下要望である。「すぐに道を戒めることを請う」とは「国家の進むべく道を戒めよ」、つまり帰属せよと要請したのである。

隋書倭王は日本國上宮聖王

(1) 608年の隋書倭王とは日本國天皇「上宮法皇」である。その治世を「法興」という。仏教信仰に厚い王であった。
隋書は「倭國」の王を「倭國王・多利思比弧」と記している。「倭國王・多利思比弧」とは「上宮法皇」である。「上宮法皇」が600年に隋・文帝に、607年隋・煬帝に二回の遣隋使を派遣した。

(2) 隋書は「冠位十二階」について記している。日本國の冠位は友好國高句麗の冠位と同じで十二階である。上宮法皇の法師は高麗僧・慧慈である。両国の交流が現れている。

元興寺丈六光銘
十三年歳次乙丑四月八日戊辰、以銅二万三千斤、金七百五十九両、敬造尺迦丈六像銅繡二體並挾侍、高麗大興王方睦大倭、尊重三寶、遙以随喜、黄金三百二十両助大福、同心結縁、願以慈福力

高麗大興王は「大倭」と親しくして、「大倭」が「丈六の釈迦像」を敬造した時、黄金320両を寄進した。「大倭」とは日本國である。高句麗と日本國の密接な友好関係を表している。